海外で身につける日本伝統音楽・日本人が学ぶ中国音楽

── 国際人の育成とアイデンティティの確立をめざして ──

前天津日本人学校　教諭
愛知県知多市立旭東小学校　教諭　加　藤　元　研

キーワード：海外における日本音楽の習得，中国音楽，特色ある教育活動，天津日本人学校，国際交流

１．はじめに

天津市は北緯38度34分，東経116度42分の位置にある。中国の華北平原の東北部に位置する。東南部は渤海に接している。面積の95％が華北平原で，残りの5％は低い山地と丘陵である。そのため平らな部分が多く，自転車の数が中国１と言われている。天津市は北京市の東南120キロの所に位置し，天津，塘沽，新港の３つの港を持ち，中国の首都北京への玄関口になっている。天津と北京間は，新幹線や高速道路によって結ばれている。また，天津市は中国中央政府の四大直轄都市の一つ（他は，北京，上海，重慶）であり，中国渤海湾に国際港を持ち，華北地方の経済・貿易の中心地である。人口は，約１千万人で，世界で15番目に大きい都市である。郊外には，万里の長城など景色の美しい所もあり，産物が豊富である。また，地方色豊かな文化を持ち，地方的な風習も残っている。周恩来記念館や租界地など歴史的な遺跡もあり，観光都市として整備されつつある。

２．活動の実際

(1) 特色ある教育活動

① 天津日本人学校行事

天津日本人学校は現在，小学部155名，中学部27名，合計182名の中規模校である。３年前には全校児童生徒が約150名だったのが，最近は，少し増加傾向にある。2008年には，天津日本人学校が設立されてから10年経ち，「天津日本人学校創立10周年記念の会」が行われた。小学校１年生から中学校３年生までのメンバーで行動する，縦割り班というものがある。各学年１～２名ずつで，１つの班が約９名で構成され20班ある。この縦割り班で行動する清掃や，朝会活動での高学年の生徒や中学部の子が小学校低学年の児童に手取り足取り仲良く面倒をみてあげる光景は，本当にほほえましいかぎりである。また，9月の運動会でも，縦割り班として各学年がそれぞれ，紅白に分かれる。特に応援合戦では，和太鼓を用いたり，せりふを自分たちで考えたりして，学年・年齢に関係なくみんな必死に頑張る。声も高らかに大きな声で響かせ，歌う。これは，天津日本人学校に来て，たくさん感動したことの中の１つであった。また，縦割り授業として，天津日本人学校では，和太鼓を取り入れた授業実践を行っている。和太鼓は，だれでも親しみやすく，手頃で簡単なので，小学部から中学部まで幅広く学ぶことができる。

運動会での１コマ

② 現地校との交流活動について

小学部は，現地の学校麗苑小学校との交流活動に取り組み，実行委員が結成される。全体発表では，和太鼓「清流のぼり打ち」「大地」など日本文化を紹介した。４分音符の簡単なリズムをたたくことができなかった子どもが，何ヶ月かするうちに，16分音符の難しいリズムをたたくことが出来るようになった。また，学校内はもちろん学

校外でも発表することで，自信をつけることができた。現地のインターナショナルスクールの子にも，和太鼓の奏法や曲を教えることができるまでに実力が上がった。自信をつけることは自国の文化に誇りをもつことにも繋がる。子どもたちから「中国の人から拍手をたくさんもらって感謝されてうれしかった。」「和太鼓はたたくだけかと思ったけど，やっていくうちに奥が深いと思った。」「言葉は分からなくても充分気持ちは通じるんだなあ。」などの感想が聞かれた。

また，学年別のクラスに分かれての交流会では，中国語での自己紹介の後，福笑いやけん玉，紙相撲などを通して文化交流をした。麗苑小学校の子どもたちと遊ぶことで，お互いの伝統を伝えながら交流することが出来た。

中学部は，インターナショナルスクール天津（IST）との交流会に取り組んでいる。

今年度も各国の民族衣装パレードに法被を着て参加した。また，日本の文化披露では和太鼓「宇治川太鼓」の演奏を中学部で演奏をし，大きな拍手をもらった。また，セッションごとに太鼓班と日本伝統芸能班に分かれ，日本の文化を伝えると同時に，多種多様な民族の集まるインター校の料理や各国の社会情勢や文化などを学び，お互いを高め合うことができた。

③　体験学習

総合的な学習の一環として「SELF」に取り組んでいる。

「S」は，STUDY，学んでいこう。

「E」は，ENJOY，楽しんでいこう。

「L」は，LEARN，知ろう。

「F」は，FRIENDLY，親しもう。

この頭文字をとってSELFと名付けている。その中で年に１回，中国文化を実体験する体験学習を行っている。自分たちで学習を計画し，実行し，検討し，学びあうことで，「生きる力」を伸ばしていく願いが込められている。学年ごとに，京劇，中国茶，太極拳，餃子作り，泥人形，剪紙（せんし），楊柳青（やんりゅうちん）に分かれ，中国の文化を学ぶ。講師の先生方は現地の中国人で，学習を通して，中国の文化や経済など幅広い視野で何十年，何百年も続く中国の文化を肌で感じ取ることができる。貴重な体験として取り組んでいる。

また，日本の文化も同様に学ぶ。海外に在住している児童生徒にとっては日本文化への渇望が強く見られる。中国人と日本人のハーフの児童生徒もおり，「自分は一体何者なのか」と思春期にはいると考える生徒もいる。

中国に長く住んでいる児童生徒から「中国にも竹で作った笛はあるし，琴（古琴・古箏）もある。中国では京劇の音楽のように，がちゃがちゃしている賑やかな音がよいとされている。なぜ，日本は同じような音楽でも小さな音をきれいな音と感じ取るのですか。」という質問を受けたことがある。そのような疑問をもち，日本と中国の共通点や相違点を考えることができたことは大変有意義であった。

④　コミュニティースクール

天津での特色を生かしつつ，地域の方々の協力を得て，茶道，尺八，琴などの日本文化や，リース作り，フラワーアレンジメントなど学びたい内容を児童生徒が選び，体験をする。学校以外の地域の方の協力を得ることができ，大変有意義な学習であった。

⑤　中国文化学習

週１回，全ての学年で日本人教師と中国語教師による中国語の授業がある。天津に来たばかりのときは「你好（ニーハオ）」「谢谢（シィエシィエ）」ぐらいしか言えなかった子が，１年経つと自己紹介や普段の生活で使う言葉を言えるようになり，中国語が身近に感じられるようになる。また，「ふるさと」「世界に１つだけの花」など日本の曲を中国語で歌い，交流会などでの発表に繋げている。

また，音楽の授業でも現地の曲を歌う機会が多い。中国では，日本で流行ったポップスが，中国語でそのまま歌われていることがあり，だれでも一度は聞いたことがある曲である。そのため，中学部でも難しい発音の曲や

メロディーを小学部低学年でも合唱することができる。3年間で手がけた曲目は，天津日本人学校校歌，橘子花開，FLY AWAY，真心英雄，茉莉花，天塔，北京ホワインニ，ONLY ONE（世界に1つだけの花），很愛很愛你（長い間）などである。

中国楽器を使用した授業

可能な限り中国の音楽に触れるようにしている。天津は，日本人指揮者小澤征爾，北京オリンピックでも活躍したピアニスト郎朗（ランラン），劇団四季CATSといった生のコンサートが身近に催され，プロの演奏が安い値段で簡単に鑑賞できてしまう環境である。そして，民族歌などは古文化街や古鼓といった昔ながらの地域に行けば，日本で映画を見るような感覚で見学することができる。中国楽器である二胡，揚琴などを天津歌舞劇院というプロ楽団から先生を招いて家庭で習っている児童生徒もいる。

中国音楽に触れ，日本の音楽と比較して考え，理解することは内外から自分を見つめることのできる国際人の育成に役立つ。それを一つのアプローチと考え，二胡・馬頭琴・古琴・楊琴・笛子などの中国楽器を授業でも取り上げた。天津では中華料理店や古文化街に行けば，中国音楽であふれている。休日の公園では練習のためか，年配の人々が二胡などを練習している。

子どもたちの感想に「普段何気ないところで音楽が流れてくるので，来たときは耳をすましていたが，だんだんそれが普通になってしまった。空気のように，あることでのありがたみは感じないが，気付いたときないと寂しい感じがする。」とあるように，生活すればするほど，日常に密着していく。しかし，そこで使われている楽器は何かと聞いても，楽器名を知らない子が圧倒的に多く，「聴いたことはあるが，深くは知らない。」というものであった。

楽器は，実際に見ただけの場合と手にとって音をだした場合とでは児童生徒の姿勢が変わってくる。目の前で音を鳴らしたときはすごい好奇心をもって耳をすます。また，楽器を前に置いたとき，児童生徒が最初にする反応はすぐに音を鳴らすことであった。その際，技術の向上よりも，児童生徒の「音を聴きたい，鳴らしたい」という気持ちを大切にした。

そして，興味がわいたところで，より興味感心を深めるため「見る・知る」→「体験する」→「深める」といった段階をふまえて，学習に取り組んだ。授業で取り扱った中国楽器は，古箏（グージョン）古琴（グーチン），笛子（ディーズ），二胡（アルフー），琵琶（ピーパー），葫芦絲（フルス），馬頭琴などである。中国は52の民族からなる国である。そのため，中国の伝統楽器はそれぞれの民族としての楽器であり，例えば，葫芦絲は雲南省の民族の楽器である。中国の伝統楽器といわれがちであるが，中国国内の何々民族の伝統楽器と考えたほうが正しい。中国楽器には，何千という楽器の種類があるので，その中でも代表的な楽器をピックアップし，中国の楽器を音楽教育に役立てるための足がかりとした。楽器の材質や音階などについて，見て，知って，体験して， 深めることで，ビデオ映像などで単に鑑賞するだけとは違い，興味をもって活動する様子が見られた。「見ているときは簡単そうだと思ったけど，実際に吹いてみると音が出なくて大変だった。」「たたき方が違うだけで音色も変わるんだと思った。」など，体験することで感じる感想も聞くことができた。また，日々中国音楽の演奏会が市街にあるホールで演奏されている。日本人になじみの深い女子十二楽坊のコンサートも簡単に聴くことができた。中国での音楽で使われている楽器や曲の題名などに興味を持ち，知識を深めることは大変意義のあることであると考える。

諸民族の音楽を授業で扱った後，中国民族コンサートに行った児童生徒は，「今まで，何となく聴いていたけど楽器の名前が分かってうれしかった。」と言っていた。中国楽器の笙と日本の楽器である尺八のジョイントコン

サートなどもあり，日本と中国の楽器を，取り込んだ曲も，近年増えてきている。中国楽器を使った現代風の曲アレンジのように，ありとあらゆるところで楽器の変化が見られ，児童生徒にとって「特別なもの」であった中国の音楽が「当たり前のもの」のように感じてきたことは，感性になじんできた証拠と思う。

３．終わりに

天津では「日本」が，日本に住んでいたときより，さらに日本について考えさせられることが多かった。長い歴史の中の中国と日本の関係や，お互いの役割など中国人の生の声を聞くことができたのもその1つである。出会った中国人に，中国と日本の国と国との関わり合いについて聞いたとき，「中国と日本といった国同士の関係ではなく，一個人として，人と人として付き合っていければ，こんなに幸せなことはない。」という言葉を言っていた。また音楽という素材を使って，お互いが楽しみながら学び，教え合うができたのも大きな収穫である。近年，音楽教育においても日本の音楽や世界の音楽について関心が高まっている。この機に応じ，多様で豊かな世界の音楽に親しみながら，理解を深めていけるチャンスを用意することができたのは非常によかった。音楽文化を通じて，人を知り，いろいろな国や人々の理解へと広がる可能性につなげ，感性を磨くことができるために，これからもよりよい教育をめざしたい。